

前号作品短評A 〈小野澤〉

●地蔵尊参りの案内きてをれど場所も何も知らない わたし

布宮慈子

前々号の作者一連タイトルは「地蔵まつり」で、今号は「村社めぐり」。一連はその首尾。事情、やりとり、動きをよくさらっているような一連。参りは、訪れておがむこと。村社を検索してみると、神社の旧社格の一、郷社の下、無格社の上に位する、とある(コトバンク)。ここから社格、郷社、や無格社なども検索することになった。

この歌(一首目)、導入歌としてはいい感じ。知らない わたし。以降、区内の活動になるか、九人のグループができて、区長さんも含まれた(六首目)。このへんのながれは同号編集後記に詳しい。

古文書や歴史に詳しくふさはしき人をり鈴木勲先生

先生はコースを考へ念入りの資料も用意しててまづ挨拶す

ふさはしき人、そういう人はいますね。この二首目、してゐて、で繋げているところ。読み手もそこに参加しているような感じ。もう少し具体が次(々)。熊蔵は、作者の曾祖父(布宮熊蔵)のよう。

熊蔵の建てたる馬頭観音は屋敷神なり話に出で来

天気よく皆しやべりつつ(一連さいこの歌)、地元根付いた(根付こうという関心・)活動が、交流の機会にもなっている。

●嘴と眼でいっばいの顔を向け三羽四羽とダチョウ寄り来る

大橋千佳子

嘴と眼でいっばいの顔、がなんともリアル。ダチョウ、世界最大の鳥、空を飛ぶことはない(でさくない)、走る。それが三羽四羽と寄り来る、どこから？

ヤドカリもいて(二首目)。仲秋は、名月や農作物に関連付けられることが多いよう、ここでは潮だまり。一連を通して七十余年を過去とするひとの生活(現実)感。叔母さんだったりする(三首目)。スローフードを作りだめする(四首目)。

スープ鍋の湯気を味わい徐に換気扇回す初冬のキッチン

およそ勝手仕事(キッチン)がみぢか。ある種のこまやかさがある。

干し柿は気が揉めるのも一興で 陽当たり、落下、洪は、カビはと

「おしたじ」は母の古びた言い回し女房言葉と知るや知らぬや

女房言葉、語頭に「お」を付けて丁寧さをあらわした、など。ここでは、おしたじ。したじ(醬油)の丁寧語になっている。

遠ざけて安穩だったまた人と関わる仕事断れずおり
この歌には、心に当るものがある。カレンダーに予定があるのがいやだという女性がいて、ベンチ仲間。じぶんもそうだった。

前号作品短評B 〈慈子〉

●上板も下板も中板までも遊びのように十八歳のわれ

小野澤繁雄

鉄ちゃんである作者のことだから、何か関係しているだろうと推測した。上板は上板橋かみいたばし（駅）、下板は下板橋しもいたばし（駅）、中板は中板橋なかにたばし（駅）か。東武東上線の駅で、上板橋のほかは普通列車しか停まらない駅のようだ。

東京の人以外は、なかなか読むのに苦労するかもしれない。話し言葉では何でも略すから、上板、下板、中板となる。この三つの駅の周辺で、十八歳の作者が暮らし、行動していたという感慨が伝わってくる。

駅キャラというものがあり鶴見駅駅のトイレでしりぬつるつく

ワンマンで三両編成鶴見線兄が通いし線に今日乗る

十五分はいられるというそのホームホーム目の前船がつづいて

鶴見駅の公式キャラクターは「つるつく」らしい。そのことを駅のトイレで知った作者。なんでもないことだが、最後に置かれた「つるつく」に興味が湧く。調べてみたら、駅員の格好をした漫画チックな鶴であった。

また、鶴見線は「国道駅」や「海芝浦駅」などと並ぶちよつと変わった駅を有する都会の秘境線だという。作者のお兄さんが通勤で使った線として、そこに思い入れがある。十五分いて、戻るまでの間に、通る船を眺める作者。何を思ったかより、その時間を楽しんでいるのだ。

●柿くらい食べさせて 仔熊撃たれる

新野祐子

昨年の秋は、熊の出没に揺れた年だった。しかし、作者は動物のほうにも心を寄せる。柿を食べに来た仔熊を撃たねばならない猟師もいるわけだが、食べさせてやってもよかったんじゃないか、と思う。自然と人間のあり方を問う一句となった。

きりふすま
霧襖のけぞるほどの注文受く

70は働き盛りすさまじや

ネズミ捕るイタチに歓声和むかな

詞書に「小さな餅工房にて三句」とあり、年末に向けて大車輪で餅をつくる仕事を続ける様子がかがえる。「霧襖」は、霧が濃く襖のように見えるさまを表す秋の季語。ネズミを捕るイタチにも歓声が上がったようだが、極度に疲れが出てくると些細なことでも反応することがある。そんな極限状態のことかもしれない。

狐のだます私でいたい目を濡らし

謀略や策略に満ちた世の中であっても、自分は自分と納得する作者。心の中に清いものをもっていなければ、いい句は詠めないだろうと思う。